

椿姫は本当に『悲劇』であるか

15D9 . . . Y. F.

一般的に椿姫は『悲劇』だと言われている。『悲劇』という言葉の辞書で引くと、「主人公が運命や社会の圧力、人間関係などによって困難な状況や立場に追い込まれ、不幸な結末に至る劇。」(goo 国語辞書より)と書いてある。では、本当に椿姫は不幸な結果に終わったのだろうか。

まず、椿姫のあらすじを考える。高級娼婦のヴィオレッタが青年アルフレードからのまっすぐな愛に心打たれ、同棲を始める。そこへアルフレードの父であるジェルモンが、息子と別れるようにヴィオレッタに迫る。理由はアルフレードの妹の結婚がヴィオレッタの娼婦という経歴のせいで妨げられているというものだった。そこでヴィオレッタは泣く泣くアルフレードと別れる。ヴィオレッタに裏切られたと思いこんだアルフレードは彼女にひどい態度をとる。しかし、ヴィオレッタが別れたのは自分が言ったからだとしてジェルモンから聞き、急いでヴィオレッタのところへ戻ろうとする。しかし彼女は高級娼婦時代の無理がたたわり、重い病気にかかっていた。かけつけたアルフレードとヴィオレッタは再会を喜び将来について語り合う。しかし、彼女の死期は近かった。その時、一瞬だけ彼女の苦しみがなくなる。そして「生きられるのね!」と言い残して、ヴィオレッタは死んでしまう。

このお話しはアルフレードにとっては大切な恋人が死んでしまう話である。このことから、アルフレードにとっては『悲劇』と言える。では、ヴィオレッタの視点で考えてみるとどうであろうか。

確かに、ヴィオレッタは死んでしまう。しかし、死というものは誰にでも訪れるので、それだけで『悲劇』とは言いきれない。もし自分が死ぬから『悲劇』であるとする、生き物はいつか死ぬものなので、どんなお話しでも最終的には『悲劇』であることになる。

では次に死ぬ時の状況を考える。ヴィオレッタは最愛のアルフレードと再会し、幸せの絶頂であったはずである。さらに死ぬ直前には病状が和らいで苦しみから解放されている。また、死ぬ時は独りで孤独に死んでいくのではなく、アルフレードやジェルモンなどに看取られている。

また、○そもそも、アルフレードからの愛を受け入れなければアルフレードを裏切る辛さ、死に別れる辛さは感じなかったはずである。またはジェルモンに別れを迫られてアルフレードと別れなければ、死の直前までアルフレードに会えないという辛さはなかったであろう。

しかし、アルフレードと出会えたことでヴィオレッタの人生は良いものにな

ったはずである。○もしアルフレードと出会えてなかったら、それこそ『悲劇』であろう。また、○ジェルモンから迫られても別れなかったとしたら、そのせいで妹からアルフレードが恨まれる『悲劇』が生まれていたかもしれない。○それを防げたことはヴィオレッタにとっては喜ばしいことのはずである。

これらのことを考慮すると、ヴィオレッタにとっては『悲劇』でなかったとも考えられる。では『喜劇』であったのであろうか。

死ぬ前にヴィオレッタはアルフレードと将来についての会話をしている。この将来はヴィオレッタが死んでしまうのでかなえられなかった。また、ジェルモンに言われてアルフレードと別れたせいで、一時期アルフレードから誤解され辛く当たられてしまった。さらにそれがもとで死の直前までアルフレードと会うことが出来なかった。

これらのことを考えると手放しで『喜劇』であるとは言い切れない。

以上のことより、椿姫は『喜劇』と『悲劇』の両方の側面を持つ、と考察できる。